

平成28年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。〔四〕は記述問題です。
- 4 解答用紙は2枚で、答え方はマークシート方式と記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名をマークシート解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙のきめられた欄に書き、さらにバーコードシールをきめられた枠の中に貼りなさい。
- 7 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 8 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 9 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

オックスフォード大学で学び、高名な動物行動学者のニコ・ティンバーゲンの弟子であるリチャード・ドーキンスは、早くから人の度肝を抜くようなアイディアを発表していた。たとえば、一九七一年の記憶のメカニズムに関する論文などはこんな具合である。

Iの通り、我々の脳の神経細胞は一日に十万個も死んでいく。これは普通は単なる老化とみなされているが、そうばかりでもない。脳細胞には神経細胞とグリア細胞の二種類がある。圧倒的に数の多い後者は、前者を構造的に支えたり、栄養を与えたりしている。ところがグリア細胞はその一方で神経細胞の「捕食者」なのである（実際、グリア細胞が神経細胞を飲み込む瞬間は光学顕微鏡でもとらえることができる）。そう考えると、この「食う者」と「食われる者」という二種の細胞の間には **II**の圧力が存在するのではなからうか。

つまり彼は、脳細胞の間にも自然淘汰の考えを導入したというわけである。彼はこの説明のためにわざわざ『種の起源』（ダーウィン著）を引用するという優雅なところを見せ、神経細胞の食われ方のパターンと記憶のメカニズムとの間に何か関係があるのではないかと示唆するのである。

論文を掲載した「ネイチャー」誌は、世界で最も権威のある科学雑誌だが、（ a ）優れた発想やアイディアの奇想天外さにも増して拍手喝采を送る雑誌である。 **III** について、現在

どういふ見解が主流になっているのかは知らないが、ドーキンスの仮説がこの分野の専門家たちを大いに刺激したことは間違いないだろう。

さて一九七六年、三十五歳の彼は、専門家、非専門家を問わず、それを読んだ者なら必ずや何らかの意見を言わずにはおられぬセンチシヨナルな本を出版した。タイトルは『利己的な遺伝子』（日高敏隆ら訳、紀伊國屋書店）。

何が利己的なのか——それは遺伝子である。では、生物とはいったい何なのか——生物は遺伝子が自らのコピーを増やすために作った生存機械にすぎない。

我々は普通、「自分」とか「自我」というものが、実体はわからないものの（ b ）大前提として存在すると思っている。遺伝子や遺伝的プログラムは「自分」が生きていくための情報を請け負っているだけで、それが主体であるはずがない。いや、（ c ）そうとしか思えない。我々が物を食べたいと思つて食物を口に運ぶと、すぐさま唾液が分泌されて、でんぷんはアミラーゼによって麦芽糖やブドウ糖に分解される。タンパク質や脂肪も、胃、十二指腸へと下るに従い、（ d ）ペプシンやリパーゼなどによって分解される。そしてアミノ酸や脂肪酸、グリセリンになる。こういう分解による産物は小腸などから吸収され、我々は生きていくうえで必要な栄養分を得ている。遺伝子や遺伝的プログラムは、我々が生

きていくうえでの実に忠実な部下ではないか。

A ところがドーキンスは、こういう考え方はひどく間違っていると指摘する。

B 遺伝子は、悠久の時間を旅する自分自身の目的のために我々の体を利用している。

C 我々のこの体は、遺伝子が自らを乗せるために作り上げた乗り物だと言うのである。

D 個体は幾つのも遺伝子が今偶然にも乗り合わせている^(注3)うたかたの存在で、個体の死が生命の終わりを意味するわけではない。

主体は最初の最初から遺伝子の側にあったのである。

よく考えてみたまえ(以下、しばらくドーキンスの主張を代弁する)。生命の本質とは何だろうか。生命の本質とは、個体が物を取り込み、それを分解し、再合成する、あるいは排泄^{はいせつ}するというような代謝や物質の変化に関係したことだろうか。それとも、この世に生まれ落ち、成長し、繁殖をし、老化し、やがては死を迎える(つまり、終わりがある)ということだろうか。その答えを探るため、我々は三十数億年前の生命誕生の時までタイム・マシンで^{さかのぼ}溯ってみることにしよう。

三十数億年の昔、地球の表面の所々は様々な有機分子が漂う、ド

ロドロとした原始のスープで満たされていた(これらの有機分子は電子顕微鏡を使ってもなかなか見えないもののだが、我々はそれが見える「携帯用電子顕微鏡」をもってしていると仮定する)。しかし、まだ生命らしきものは現われてきていない。タイム・マシンを少し未来の方へ進めてみよう。何万年か進んだ時、突如として我々は、^③奇妙なふるまいを示す分子の一团を見出すことになるだろう(この場合にも例の電顕が必要である)。それは長い二本の鎖が絡まり合うような構造をしており、驚いたことに鎖がほどこけた部分では、元の鎖が鑄^い型となつて鎖が再生されるといふ現象が起きている。

これだ。生命の本質とは、^④自分で自分のコピーを作ること、つまり自己複製をすることなのだ。

その「自己複製子」は最初はむき出しのままだった。様々なタイプの自己複製子が存在しており、それぞれが複製の速度や安全性(寿命)、あるいは複製の正確さなどについて競^たっていた。但し、複製はあまりにも完璧^{かんぺき}に行なわれないう方が良く、非常に稀^{まれ}にコピーミス^{ミス}を犯すという性質が実は後々まで不可欠となるのである。

むき出しの自己複製子は、むろんそのままでは傷つく恐れがあるので、周囲に防護壁や防護壁と自分との間を埋める物質を作り始めた。いや、正確には、そういう物を作ることに成功した自己複製子のみが生き残ってきたと言ふべきだろう。そういつた一連のことを実現させるには、自己複製子が稀にコピーミス^{ミス}を犯すという性質(突然変異)が大きく関わっている。

こうして自己複製子は最初の乗り物らしきものを作った。そして時間の旅をより快適、かつ安全なものにするために、今度は乗り物の改良に取りかかったのである。

(竹内久美子「そんなバカな！」から)

(注1) 示唆Ⅱほのめかすこと

(注2) アミラーゼ、ペプシン、リパーゼⅡいずれも酵素の名前

(注3) うたかたのⅡはかない

問一 **I**・**II** に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

- ア [I] 既知 II 増殖 イ [I] 予想 II 優劣
ウ [I] 御覧 II 並列 エ [I] 周知 II 淘汰

問二 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

- ア [a] 本当に b やはり c 同時に d とにかく
イ [a] とにかく b 本当に c やはり d 同時に
ウ [a] 同時に b とにかく c 本当に d やはり
エ [a] やはり b 同時に c とにかく d 本当に

問三 **III** に入る言葉として適当なものはどれか。

- ア 記憶のメカニズム
イ 遺伝子
ウ 神経細胞の「捕食者」
エ 自然淘汰

問四 **①**「自分」、**④**自分とあるが、「自分」にだけ「」がつけられている理由として適当なものはどれか。

- ア あくまでも一般的な定義であることを示すため
イ ドーキンスの著書から引用したことを示すため
ウ 遺伝子の比喻として使われていることを示すため
エ 生物学的な意味で使われていることを示すため

問五 本文中の **A** から **D** の文を正しい順序に並びかえたものはどれか。

- | | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| エ | ウ | イ | ア |
| [D] | [A] | [C] | [B] |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| [B] | [C] | [A] | [D] |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| [C] | [B] | [D] | [A] |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| [A] | [D] | [B] | [C] |

問六 ^② ドーキンスの主張とあるが、それに対する一般的な考え方として適当なものはどれか。

ア 生物は、遺伝子が自らのコピーを増やすために作った生存機械にすぎない。

イ 個体は、遺伝子が生き続けていくために作り上げられた乗り物だと言える。

ウ 主体は個体にあり、遺伝子は情報を請け負っているだけの存在にすぎない。

エ 遺伝子や遺伝的プログラムは、我々が生きていくうえでの実な部下ではない。

問七 ^③ 奇妙なふるまいとあるが、それはどのような「ふるまい」か。適当なものを選べ。

ア 突然変異すること

イ 自己複製をすること

ウ 周囲と自分との間を埋める物質を作り始めること

エ 乗り物らしきものを作ること

問八 本文の中で述べられている「生命」の説明として適当なものはどれか。

ア 生き残っていくために、周囲に防護壁や防護壁と自分との間を埋める物質を形成するもの

イ 自ら代謝や物質の変化をうながし、自分の身体を形作っていくもの

ウ この世に生まれ落ち、各個体の情報を請け負ってやがては死を迎えるもの

エ 稀に突然変異を起こしながら自己を複製し、生き続けていくもの

問九 本文の中で述べられている内容と合うものはどれか。

ア 脳細胞内にあるグリア細胞は、神経細胞を構造的に支えたり栄養を与えたりする有能な細胞であることが証明された。

イ ドーキンスの記憶のメカニズムについての仮説は、突飛な内容だったため、専門家からは受け入れられなかった。

ウ 生命とは、「自分」と同じように実体についてはまだ解明されていないが、確実に存在するものとされた。

エ ドーキンスの『利己的な遺伝子』は、従来の考え方に対し異議を唱えるような内容であった。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

主人公の「私」は病気で入院中の中学校の同級生（「彼女」）を見舞いに来ている。本文の前半は病室を出た後に、「私」が中学校時代のことを回想している場面である。

やることを聞いてひとり教室に戻った。誰もいなくて電気がこ
うこうとついていた。本来五、六人でやる作業をひとりで、しかも
やる気のない私がやっているのだから、進むはずもない。

私は西日がぎらぎらと部屋中に射^さしてくる中、どんどん悲しくな
りながら、いやいや手を動かしていた。線をひいたり、グラフを作
ったり、ほんとうにばかみたいだと思った。

その時、がらつと教室の戸が開いて、彼女が入ってきた。

「どうしたの？」

と言った私は涙声だった、友達がなぜか来たという喜びよりもむ
しろ、久しぶりに美しいものを見たという素直な感動からだった。

皮肉にゆがんでいない口元や、自由^①にふるまえる人生に対するね
たみによこれていない人の姿。さつそうと教室に入ってきた彼女は
その時ほんとうに美しかった。制服が大きく見えるほどの細い体の
きびきびした流れるような動きも、樺みたいな腕のなまめかしさも、
正直な茶色い大きな瞳も、はっとするほどきれいだった。

「図書館で調べものしてたんだけど、もしかしたらまだいるかと思
って。」

彼女は高く透き通る声でそう言った。

「なんでひとりでやってんの？」

私は説明しようとしたが、思わず涙ぐんでしまった。

「手伝うよ。」

彼女は言っ、すぐに手伝いはじめた。

もしも私だったら、なにがあつたかを聞いて、もつと相手を泣か
せてしまっただろう。いっしょに怒つたり泣いたりしようとして、
もつと相手をみじめにしただろう。しかし彼女は何も聞かず、ただ
手を動かしはじめた。^②

今になって考えると、それは自分が病気になったとわかつた時の
彼女のいさぎよさとまつたく同じ質のことだ。必要以上のことはし
ない、しかし逃げもしない、他のいろいな味付けでごまかさない。^③

私はその性質をその強さも弱さも含めて一言で言いあらわせるよう
に思う。彼女は^④気高い人だ。

もくもくと真っ白い紙にもさしを当てて線を引く彼女の茶色い
髪が西日に透けて金色だった。そのか細い指もオレンジ色に染まっ
ていた。射してくる光のせい^⑤で、部屋の中はまるで真昼のように明
るく暖かかった。

暗くなつて帰る道すがら、何度もありがとうと私は言った。彼女
は「しつこいな、なんにもしてないよ！」と言つて何度も怒つては
笑顔を見せた。

お見舞いの帰り道、偶然もうひとりの幼なじみにあつた。彼女の
お見舞いに行ったと告げると、実は私も昨日顔だけ見に行つてきた、

と彼女は言った。

その幼なじみは、五歳から高校にあがって私が引越すまでずっと私の家のなりに住んでいた。今は結婚して、子供が産まれるのでまた実家に帰ってきていた。(a) 今にも産まれそうで、お腹がばんばんに大きかった。

送っていくよ、と私は言い、ふたりで真冬の夕暮れの道をゆつくりと歩いて行った。五歳の時の同じ狭い路地の道を、五歳の時と同じ人と歩くのはとても変な感じがした。(b) そのお腹の中にはまだゼロ歳の人がこの世に出てくるばかりに育っているのだなんて。

幼い頃にしか通ったことのない裏道を歩くと、壁が低く見え、道が小さく狭く見え、(c) ミニチュアの街を歩いているようだった。空はピンクとオレンジの間の色で、雲がとぎれとぎれにきれいに染まっていた。

おのずと入院中の彼女が明日手術だという話題になっていったので、なんとなく口数は少なくなった。ふたりにとつて「いつもの」道だったはずの道をこんな不思議な状況で並んで歩くことになるなんて、^⑦ 妙なことだと思った。片方は故郷を遠く離れそこで仕事をもち、片方はお腹に赤ちゃんがいて、でも昔と同じ声の調子でぼつぼつと話し合うのは、共通の友達のも、命に関わるかもしれない病気のことで、なにもかも変わらなず、しかしすべてがちよつとずつゆがんでいくような気がした。

昔、幼かったこの子と私は、この狭い街の中を、すみずみまでふ

たりで走り回った。どんな小さな変化も見のがさなかった。あの家の塀につたのようなものがあり、その白い花は臭い、とか、石段のはじっこがまた少し欠けて、そこにクローバーが生えてきている、とかいった具合に。街中の小さな空き地に自分達がそこを知りつくしている証拠の小さな宝物を埋めて地図を作ったし、人の家の庭を塀を越えてはいくつも抜け、自分達だけの通路をめぐっていた。

そして、いつかふたりで遠出をした時、だだっ広い空き地を見つけたことがあった。とりこわされた建物は(d) あとかたもなく片付けられ、一面に草が茂り、小さな花がたくさん咲いていた。空き地の奥は崖になっていて、昔海だったという遠い街並みをはるかに見下ろすことができた。目の前に何もなくて、風が吹いてきて、今にも海の匂いがしてきそうだった。草を踏んで、花をつんで、がれきに登ってさんざん遊び、目の前の街並みが夕闇に沈む夜景のきらきらになるまでそこにいた。

そこに病院が建ち、ずっと、ずっと後でもうひとりの大切な幼なじみがそこに入院することになるなんて、これもまたなんというおかしなことだろう。

当時と全く同じ角度で街が西日でいっぱい満たされていく。^⑧ 私
はなんとなく気が狂いそうだと思った。自分の歳も住んでいるところもわからないような感じがした。夢に出てくる風景の中を歩いているようだった。それはいい夢でも悪い夢でもなかったが、現実からは遠く離れていた。今歩いているこのミニチュアの世界で、自分だけがぐぐつと巨人になって、高い高いところから私達のちっぽけ

な人生のあれこれすべて、昔から今までの全部を見つめていよう
な錯覚にとらわれたのだ。

その眺めは決して悪くなく、妙に明るく愛情深い、きれいな感
触だった。
(吉本ばなな「明るい夕方」から)

問一 ① 自由にふるまえる人生に対するねたみによごれてない人と
あるが、その説明として適当なものほどれか。

- ア 自由な生き方を人に押し付けたりしない人
- イ 他人の自由な生き方に対して、うらみ、憎んだりしない人
- ウ 他人の自由な生き方に対して、自分を見失ったりしない人
- エ 自由な生き方にあこがれを抱くことができない人

問二 ② もっと相手をみじめにしただろう。とあるが、そう「私」が考
える理由として適当なものほどれか。

- ア いくら相手の身になって考えても、その気持ちは相手には伝
わらないから
- イ 同情が単なる自分の自己満足だったことを、相手に悟らせて
てしまうから
- ウ 同情を寄せることで、かえって相手の心の傷を深いものにし
てしまうから

エ かわいそうと思う自分の気持ちを、相手に押し付けているだ
けだから

問三 ③ いさぎよさ、⑤ 気高い人の本文中での意味の組み合わせとして
適当なものほどれか。

- ア 「③ さっぱりした気質」 ⑤ 気品のある人
- イ 「③ 強情な気質」 ⑤ 身分の高い人
- ウ 「③ 穏やかな気質」 ⑤ 気位の高い人
- エ 「③ 熱しやすい気質」 ⑤ 孤高の人

問四 ④ いろいろな味付けとあるが、「味付け」がたとえているもの
として適当なものほどれか。

- ア 批判
- イ 冗談
- ウ お世辞
- エ 言い回し

問五 ⑥ 部屋の中はまるで真昼のように明るく暖かかった。とあるが、
そう感じた時の「私」の様子として適当なものほどれか。

- ア 彼女の無償の行為によって、仕事を押し付けた人たちへの不
満が解消されたように感じている。
- イ 彼女の優しいふるまいを、自分ひとりだった寂しい部屋に差
し込んでくる救いの光のように感じている。

- ウ 彼女のなにげない態度を、私の世の中に対する怒りを解きほぐす暖かい日差しのように感じている。
- エ 彼女の手助けが、現実から逃れたいと思っていた私の心に勇気を与えてくれたように感じている。

問六 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものほどれか。

- ア 「a まるで b ほとんど c ほんとうに d しかも」
- イ 「a しかも b ほんとうに c ほとんど d まるで」
- ウ 「a ほんとうに b しかも c まるで d ほとんど」
- エ 「a ほとんど b まるで c しかも d ほんとうに」

問七 ⑦ 妙なことだと思った。とあるが、その時「私」が抱いた違和感の説明として適当でないものはどれか。

- ア 幼い頃歩いた道と同じ道を歩いているのに、自分と友達がそれぞれ全く異なる人生を歩んでいることへの違和感
- イ 思い出の中の風景と、目の前にある風景とがまったく変わっていないことへの違和感
- ウ ふたりの幼なじみのなかに、命に関わる相反するものが存在していることへの違和感

- エ 偶然あつた幼なじみと、共通の話題で話をしながら歩いていることへの違和感

問八 ⑧ 私はなんとなく気が狂いそうだと思った。とあるが、その理由として適当なものほどれか。

- ア 時間と場所の感覚がなくなり、自分だけがさまざまな人生のすべてを見渡しているような錯覚に陥ったから
- イ 変わりつつある現実の中で自分だけが過去に執着し、現実から取り残されてしまったような錯覚に陥ったから
- ウ 時間と場所の感覚がなくなり、人々の人生まで無意味なミニチュアの世界で営まれているような錯覚に陥ったから
- エ 幼い頃の風景を思い出しているうちに現実感がなくなり、自分が当時にタイムスリップしたような錯覚に陥ったから

問九 本文中の「西日」についての説明として適当なものほどれか。

ア 「私」にとつての過去を象徴し、主に子どもの頃の記憶をたどる場面で用いられる。

- イ 「私」にとつて現実感の喪失を象徴し、「私」が夢を見ている場面で用いられる。
- ウ 「幼なじみ」との美しい思い出を象徴し、「ミニチュアの街」などの幻想的な表現とともに用いられる。
- エ 何ものにも代え難い美しい思い出の崩壊を象徴し、夜に移る時間帯で用いられる。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

親が宝を買わせに渡した五十貫の銭を、子は五匹の亀を救うために使ってしまった。その亀を殺そうとしていた人はその後、銭もろとも船の転覆事故で水死してしまう。

心に思ふやう、親の銭を亀にかへてやみぬれば、親いかに腹立給はんずらむ。さりとして又、親のもとへ行かであるべきにあらねば、親の家に帰行て、銭は亀にかへつるよし語らんと思ふ程に、^(a)「なにとて、この銭をば返しをこせたるぞ」と問へば、⁽²⁾「さる事なし。その銭にては、亀にかへて、ゆるしつれば、⁽³⁾そのよしを申さんとて参りつるなり」といへば、「黒き衣着たる人、おなじやうなるが五人、各々十貫持て来たりつる。」とて見せければ、この銭⁽⁴⁾「いまだ濡れながらあり。」はや、^(b)「買て川に放しつる亀の親のもとに子の帰らぬさきにやりける也。」（「宇治拾遺物語」から）

問一

なにとて、はやの本文中での意味はそれぞれどれか。

- (1) なにとて
 - ア なんの代わりに
 - イ どうして
 - ウ 何者が
 - エ どのようにして
- (2) はや
 - ア ああ
 - イ なるほど
 - ウ おそらく
 - エ 実は

問二

親いかに腹立給はんずらむ。の解釈として最も適当なものはどれか。

- ア 親にきつと叱られてしまう。
- イ 親にどのようにして叱られてしまうだろうか。
- ウ 親はどれほどお叱りになるだろう。
- エ 親は言うまでもなくお叱りになるはずだ。

問三

問へば、の主語として適当なものはどれか。

- ア 子
- イ 親
- ウ 黒き衣着たる人
- エ 作者

問四

そのよしの内容として適当なものはどれか。

- ア 親からもらった銭で亀を買い、川に逃がしてやったこと
- イ 家で飼うために亀を買ったが、無駄になってしまったこと
- ウ 亀を助けたことにより、銭も親も失ってしまったこと
- エ 見返りを求めて亀を助けたが、何も得られなかったこと

問五

いまだ濡れながらあり。の理由として適当なものはどれか。

- ア もとの亀の持ち主が反省し、銭を返しに来たから
- イ 亀が子の思いやりに感動し、涙を流したから
- ウ 亀が銭を戻しに来たかのような演出を親がしたから
- エ 助けられた亀が川の中の銭を拾って届けてくれたから

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

万物をやわらかく潤すのが春雨なら、秋雨は夏のほてりを冷ますしめやかなイメージか。言葉としては「春雨」の方が古くからあったという。国語学者の故金田一春彦さんによれば、秋雨は春雨に対する言葉として江戸の中頃(a)に生まれたそうだ。▼だが、時の文人たちはこの新語をだいぶ苦々しく感じたらしい。当時の書物には「春雨に対して秋さめと心得給ふは大に非也」などと「日本語の乱れ」を嘆くくだりもあるという。金田一さんの著作からの受け売りである。▼そんな秋の長雨の時期に、列島は入りつつあるようだ。①北に前線、南には台風が二つ、予報には傘マークが並ぶ。□雨から程遠い、大雨への警戒が各地で続いている。▼大きい川は台風が過ぎて青空になっても水位が上がり続けるそうだ。防災に携(c)わる人は「　」も承知だろうが、とつぜん発生するのが災害というもの。昨日までの無事が今日の安全を保証してくれないことを、尊い犠牲とともに私たちは刻んできた。▼地震に比べ、死者が数千、数百人という台風被害は近年にはない。これを、大きな作戦では勝利しながら局地戦で手痛い負けを喫していると評した人もいる。④もう、これ以上の犠牲を出さずに、台風を去らせた。

(朝日新聞「天声人語」から)

問一 中頃(a)、文人(b)、携(c)の読みをひらがなで書きなさい。

問二 ①ようだの品詞名を漢字で答えなさい。

問三 □に入る言葉を、本文中から五字で抜き出しなさい。

問四 「　」も承知が「十分に理解している」という意味になるように、　」の中に漢字一字を入れなさい。

問五 ③とつぜん発生するのが災害というもの。とあるが、この部分で用いられている表現技法を答えなさい。

問六 ④もう、が直接かかっている文節を、同じ一文から抜き出しなさい。

